

# 学生によるゼミ案内

## ～うちのゼミ紹介します！～

国際社会学部では、3年生からゼミを履修します。(注：指導教員が開講する専門演習が「本ゼミ」です。普段は「ゼミ」と呼びます) 教員の指導を受け、ゼミ仲間との議論を経ながら自分の研究を磨き、最後に卒業論文としてまとめることとなります。

…といっても、ゼミの具体的なイメージがなかなか湧かない、という学生も多いのではないのでしょうか。そこで、既にゼミを経験した皆さんの先輩の声の一部を、ここに紹介します。ゼミ生の声から、ゼミの雰囲気を感じてみてください。



### (地域社会研究コース 生駒美樹ゼミ)

生駒ゼミは文化人類学的手法を学べるゼミで、主に東南アジア専攻の学生が所属しています。文化人類学はフィールドワーク調査が必要なため、ゼミでは学生が卒論のテーマに関連する文献を持ち寄り、一緒にその手法を学んでいます。生駒先生は穏やかで優しい先生で、学生の意見を肯定しつつ様々なアドバイスを提供してくれます。自分の興味がまだ明確に定まっていない方も、生駒ゼミを通して自身の新たな興味を見つけられるはずです。そしてゼミ内では、文献を読んだ後に学生がそれぞれの所属地域での事例を共有したり、身の回りの生活とも照らしながらするため、毎回刺激を受けること間違いなしです。また、生駒先生が実際に赴いたフィールドワークの経験も話してくれるため、フィールドワークの雰囲気や全体像を細かく掴むことができます。新しい見方や発見を得ながら、日々の「あたりまえ」に問いを投げ掛け合えるそんな場所が生駒ゼミです。(S.N. K.F.)

### (地域社会研究コース 青木雅浩ゼミ)

青木ゼミはいわゆるモンゴル語科の語科ゼミですが、先生はロシア語や旧ソ連地域の事情にも通暁しておられます。私はロシア語科の所属で、卒論でもロシアの問題をテーマにしましたが、手厚い指導を受けることができました。モンゴルはもちろん、ロシア・旧ソ連地域について扱いたい学生にもおすすめできるゼミです。1人あたり1コマ分の時間を使って発表し、先生とゼミ生の指摘を受けながら卒論の内容と方向性を修正できます。この発表と修正の繰り返しが卒論全体の完成につながります。先生から特に念入りにご教授いただいたのは論理的整合性や問題へのアプローチについてでした。これらの点をしっかりと検討することは、どんな卒論にとっても重要です。また、私の卒論テーマは他のゼミ生にとってあまり馴染みのない分野でしたが、だからこそ説明不足の部分を客観的に指摘してもらえたことも勉強になりました。丁寧な指導と議論の場が開かれていることがこのゼミの特徴です。(中崎諒)

### (地域社会研究コース 青山弘之ゼミ)

地域研究の意義、それは「劣化する智への最後の牙城」(先生の言葉をお借りして)。遠い中東の情報も日本にやってくるようになった現代社会。「内戦」「民主化」「イスラーム」といった便利な言葉によって中東の事実が歪められたり隠れたりしていませんか？このゼミでは、批判的な目も持ちながら、様々なツールを使って、中東で本当に起こっている事実を分析します。ここで使えるのが、現地の言語、文化への理解、留学や交流を通して得た人々の考え方、「肌感」です。青山ゼミでは、3年生で「テロとの戦い」や「膠着するシリア」など、先生の専門と関連した分野の本に関して議論します。4年生になると各々自分の関心あるテーマ(中東に関わっていればOK)に合わせた本を持ち寄り、議論します。と、ここまで書いてきましたが、難しい話ではありません。あなたの中東への好奇心を入り口に、中東の世界へ没入し、私たちとともにその魅力に浸ってみませんか！(大屋千寛)

### (地域社会研究コース 大石高典ゼミ)

“おいしい”(OISHI)ゼミの一番の特徴は、地域・言語に縛られず、自由に研究テーマを設定できることにあります。自分の専攻地域に限らず、今の自分にとって最も関心のあるもの(農業、民族、料理、音楽、ダンスなど)をテーマに研究を進めることができます。大石ゼミでは、「フィールドワーク」を主な手法としていますが、そのフィールドは遠く離れた海外に限りません。自分のバイト先や所属しているサークル、通い慣れている場所など、普段の生活圏がフィールドとなることもあります。「日常をフィールドワークする」という視点の土台を作るために、3年春学期にはフィールドワークに関連した書籍の輪読を行います。「ゼミ」と聞くとなんだか堅苦しく感じますが、大石ゼミには常にアットホームな雰囲気が漂っており、研究に息詰まった時には、いつでもゼミ友や大石先生に相談できる環境が整っています。のびのびとした環境で、自分のやりたいこととことん向きあってみませんか。(小森まな)

(地域社会研究コース 大石高典ゼミ)

大石ゼミにいらっしゃいませ！当ゼミは、学生主体のゼミです。そのため、構成している学生の個性が強く反映されます。卒業研究の手法も、より効果的に伝えられるなら、論文に限らず、音楽媒体や写真、映画、絵本などで卒業制作として表現することが出来ます。どんな人でも主体的に取り組むのなら、その個性を存分に発揮できること間違いありません。また、当ゼミにタブーはありません。自分が疑問に思ったことはとことん突き詰めて、みんなで考えることができます。それは、教室に留まりません。意外と、雑談でポロっと言ったことが本質を突いていることもあります。桜鍋をつつきながら、海水浴でヨガをしながら、日本酒を嗜みながら、人生について考えませんか。(塚本直希レイ)

(地域社会研究コース 川本智史ゼミ)

川本ゼミでは「建築史・都市史、オスマン史」を中心に扱っています。そんな本ゼミの最大の特徴は、街歩きを行うことです！（人数によって頻度は変わります。）普段漠然と歩いている街や有名な建物など様々な土地を訪ね、立地、歴史的経緯、時の権力者との関係…などを我々が生活している空間から読み取る練習をします。「トルコやオスマンに興味があるけど、建築以外はできないのかな…」と思ったそこのあなた！ご安心ください。“ガチ”オスマン語を使用したオスマン史やトルコの政治や文化、歴史についても学ぶことができます。3年次では文献の輪読や街歩きを通して自分自身の興味関心を深めていきます。4年次では卒業論文のテーマを決め執筆していきます。川本先生はトルコに関するだけでなくトルコ以外の地域の建築や都市に関しても手厚くご指導して下さります。トルコ語科以外の学生も多く所属しており、自身の興味関心に合わせて自由に卒業論文を書くことができます。トルコについて研究したい方、建築や都市について研究したい方、ぜひ川本ゼミへ！（清野真帆）

(地域社会研究コース 菊池陽子ゼミ)

菊池ゼミは東南アジアに関するテーマであれば基本的に何でもOK。菊池先生はラオス近現代史を専門とされているので、歴史を軸に東南アジアの研究をしていきたい方にはピッタリのゼミです。授業では、植民地期のカンボジアで発行されていた新聞を読み、当時の報道のされ方や生活などについて意見交換を行いました。卒論のテーマとしては、「ミャンマーにおける教育」や「第三次中曽根、竹下政権期の日本の対ベトナム外交」など、東南アジアに関連していればそれとことん追求できます！バラバラな専攻地域の学生が集まり意見交換をするからこそ、自分が今まで持っていなかった視点にも気づくことができるのが本ゼミの良さです。東南アジアにおける経験豊富な菊池先生のラオス愛トークを聞きたい方は是非！（平戸ゆり 神山奈々）

(地域社会研究コース 木村暁ゼミ)

木村ゼミでは主に中央アジア地域に関連する事柄について時代や学問領域を問わず、自由な研究が可能です。ゼミ生は各自卒業論文の執筆に向けテーマを設定し、授業内では各自の興味関心に基づく発表（論文批評、訳注）を行います。具体的な授業形式については相談の時間が十分に設けられており様々な形式を考えることが可能ですが、いずれも毎回の発表に向け各学生の自主性と独立性を重んじている点は本ゼミの特徴と言えます。発表の後には学生同士での質疑応答と情報共有、そして先生からの研究手法や論の組み立て、翻訳や形式に関するきめ細かなアドバイスを受けることができるため、自身の研究プロセスをじっくりと振り返りながら修正、進行してゆくことが可能です。「もうすでに卒論のテーマが決まっている」という方も、「まだ研究テーマが決まっていなくても中央アジア / 旧ソ連地域の研究をしようかな」という方も互いに気負わず各自のペースで研究が可能ですので、当該地域に少なからぬ興味関心がある方はぜひ木村ゼミをご検討ください。(今井啓太)

(地域社会研究コース 久米順子ゼミ)

久米ゼミでは、最初は自由に選ぶ好きな題材について、そして徐々に卒論の執筆に向けて、担当回に行うプレゼンを通し、自分の興味関心とそれに対する理解を深めていきます。先生はご専門であるイベリア半島の中世美術史に留まらず、西洋美術史全般や建築・文化・音楽などと社会的な影響に造詣が深く、掘り下げや説明の甘かった箇所への質問や、魅力的で説得力のある切り口の補足、論理展開のバランス修正にも非常に助けになってくださいます。学生は美術・文化に関心が強い者が多く集まるものの、蓋を開けてみれば専攻言語・地域も様々で、興味関心も多岐に渡るからこそ、交流を通して思わぬ発想が生まれたり、新しい分野に触れたりできるのも魅力のひとつです。発表も卒論執筆もテーマに関する自由度が高く個人の裁量によるところは大きいですが、それに対する先生・学生からの反応は自分で向き合うだけでは得られない着眼点や膨らませ方をもたらしてくれます。(桜井七海)

(地域社会研究コース 倉田明子ゼミ)

倉田明子先生のゼミでは、主に「歴史」を軸に中国・香港地域を考えます。ただ、対象地域は上記に限定されず、シンガポールやマレーシア等、幅広く取り扱われます。ゼミ形式に関して、三年次では事前に論文を読んでレジュメを作成し、授業で疑問や自分の考えを話し合います。私は「容闈一米中間で揺らぎ上昇する境界者」「中華料理のモダニティ」という論文が印象に残っています。歴史上の人物の生き方や当時に残された文献から、現在の問題を考える上での多角的な視点と知識を得られ、卒業論文を書く際に大いに役立ちました。四年次は卒論執筆が中心で、先生と相談しながら方針を決めていきます。卒論のテーマは自由。それぞれの興味関心に合わせて、卒業論文に取り組むことができます。学生個人の関心と主体性が尊重された中で学びを深めることができるゼミだと思います。「中国」「香港」「歴史」(+関連した地域やテーマ)に関心がある方、ぜひ倉田ゼミへお越しください。(相馬佳菜子)

(地域社会研究コース 坂井真紀子ゼミ)

坂井ゼミは、「アフリカ地域研究ゼミ」という名前が冠されています。しかし、一口に「アフリカ地域」と言っても、その環境や文化は国や地域によって全く異なります。というわけで、坂井ゼミに所属する学生の興味関心も実に様々で、地域開発に興味がある学生、紛争や平和構築に興味がある学生、アフリカ映画に興味がある学生あるいはアフリカ地域の多様な側面に魅せられてまだ専門が決まっていない学生…など。そのため、私たちのゼミでは、ゼミ生が毎週読みたい文献を持参し輪読し議論するという形式をとっています。筆者自身も同期たちの鋭く思慮深い発言にハッとさせられることがばかりで、日々アフリカ地域への知識や見方を更新することができています。幅広い関心をもつ学生たちと建設的な議論をしながら自分の意見や価値観を相対化し、固定観念を取り払い、アフリカ地域の本当の姿に迫ってみませんか？あなたの研究したいテーマもきっと見つかるはずです。(高橋昌暉)

(地域社会研究コース 鈴木義一ゼミ)

鈴木ゼミはロシアを中心とした旧ソ連圏諸国を対象とした地域研究を学ぶゼミです。政治・経済・社会・外交といった社会科学の諸分野からテーマを選ぶことができ、対象となる時代も近代から現代と幅広いのが特徴です。実際に現在所属している学生のテーマもアルメニア現代政治や帝政ロシアの民族政策、ソ連外交史など多岐にわたっています。

3年春学期のゼミでは当初示された課題文献を読んで学生がそれぞれについて発表を行い、それを基にした議論を行います。春学期終盤から秋学期は卒論を見越して課題文献の選択が各自のテーマにあわせて自由となり、議論もそれぞれの専門にあわせて深まります。そして秋学期末には卒論の予行練習として16,000字程度のゼミ論文を執筆し、こうした準備を踏まえて4年次には卒論執筆に取り組めます。

近現代の旧ソ連圏を対象にした地域研究を行いたい学生を鈴木ゼミは歓迎しています。(小副川将剛)

(地域社会研究コース 左右田直規ゼミ)

左右田ゼミは島嶼部東南アジア地域が専門です。教育、宗教、政治、移民、ジェンダーなど、ゼミ生の関心は様々で、発表を通して多くの切り口から東南アジアに触れることができます。ゼミではまず論文の書き方や島嶼部東南アジアの成り立ちを学び、その後は研究したい分野の先行研究を批評して卒業論文のための問いを見つけしていきます。3年生の夏学期以降は、問い、研究方法、資料収集、分析方法等をまとめた、卒論の骨組みとなる卒業論文計画書を書き始めます。4年生の春学期頃になると、いよいよ卒論を書き始め、個別指導を通してブラッシュアップしていきます。以上の一連のゼミの活動を通して批判的思考力や論理的思考力を養うことができ、また先生や同期、先輩のコメントから自信の視野を広げていくことができます。卒業論文を書き上げた後は以前より一回り成長したと感じられるのではないのでしょうか。満足に行く卒業論文を書きたい方、東南アジアに興味のある方におすすめのゼミです！(大竹未来)

(地域社会研究コース 巽由樹子ゼミ)

巽ゼミではロシア史に関する文献や一次史料を批判的に講読・分析することを通し、研究手法を身に付けていきます。巽先生が指定した文献を読み込み、各自の担当の回に文献の内容や考察を発表し、議論を行っていくという授業形式です。ソ連時代の雑誌の現物を各自で選び分析することも！

3年冬頃から卒論テーマを決め始め、4年秋から本格的に執筆していきます。効率的な文献の探し方や参考文献の書き方から、研究に必要な基本的要素の丁寧な指導を受けることができます。卒論テーマは、自分の興味関心に沿って選択できます。そのため、本ゼミ生の卒論テーマは文学や料理、宗教や政策など多岐に渡ります。自由自在に研究テーマを設定でき、他のゼミ生の発表を聞くことを通し他分野のことも知ることもできるのも巽ゼミの魅力の一つです。現在刻一刻と情勢が変化するロシア地域について(でなくても)、新たな発見をするチャンスをぜひ巽ゼミで掴んでください！(鈴木美佳)

(地域社会研究コース 千葉敏之ゼミ)

私が千葉ゼミを通して得たものは、本気で学問に向き合ったという自信と、知ることの喜びだといえます。そしてその考えは卒業して5年が経った今も変わらないままです。千葉ゼミでは、毎講義に中世ヨーロッパ世界との新たな出会いがあります。そしてその出会いを最も喜び、最も真剣に向き合っているのは千葉先生といえるでしょう。ゼミ生はそんな先生の姿をみて、新たな知を得る機会は皆に平等に与えられていること、それから、純粋な知的探求の喜びを知ることになります。千葉ゼミを通して体得する、文献の読み方・史実の捉え方・考察の論じ方、すなわち歴史を自分なりに解釈する方法、その作法は生涯を通じてあなたの武器であり、新たな知という喜びをもたらす財産になります。卒業後、エレクトロニクス企業に勤め、現在は縁あって南米に暮らす私自身、新たな世界に触れる度にそのことを実感しています。是非あなたにも、自身の知的好奇心の赴くままに、先生と共に中世ヨーロッパ世界に没入する、そんな千葉ゼミでしかできない経験をしてほしいと思います。(中野遥香)

(地域社会研究コース 登利谷正人ゼミ)

南アジアは経済発展を続け、急速に市場が拡大しているブルーオーシャンです。登利谷ゼミで南アジアについて深く学び、日本と南アジアを繋ぐ国際人材を目指しませんか？私たちのゼミでは、主にパキスタンやアフガニスタン、インドを中心に、歴史、経済、文化など、様々なトピックを学生自身が選択しながら学びを深めることができます。日々のゼミ活動では、南アジアに関係のある論文や書籍を輪読し、先生の解説を参考にしながら議論を深めています。また、定期的に、ゼミ生自身が自由に選択したトピックについて相互発表会を実施しています。基本的に少人数のゼミで、先生と生徒の距離が近いことも特徴です！そのためゼミでの学びや卒業論文の方向性のみならず、私生活や履修に関する相談も気軽にできる環境です！私たちのゼミに入って、南アジアを共に楽しく学びましょう！ゼミ生一同、新たな仲間をお待ちしております！！

(東佑太、古田花梨)

(地域社会研究コース 藤井豪ゼミ)

藤井ゼミは朝鮮近現代史を扱うゼミですが、フェミニズムやマイノリティへの差別など、様々な関心を持つ学生が集まっています。ゼミでは、他者との対話の中で自分の考えを言語化することを大切にしています。毎週課題文献を読み討議を行います。何気ない会話から自分の考えが実は固定観念に満ちたもの、あるいは他者を無意識に傷つけるものであった、と気付く時があります。日本で朝鮮を語ることがタブー視される中、こうして自分の思考過程に向き合うことは「なぜ朝鮮に興味を持つのか」を問い直す機会になります。また、自分は他者どう関わられるかを自問自答し、そのための態度を養うことは、大学という枠を超えた自分の生き方を見つめることに繋がるでしょう。とはいえ、先生を交えて学食に行ったり、ゼミ旅行に行くなど、穏やかで楽しい雰囲気のできるゼミです(笑)

朝鮮史、日韓関係、フェミニズムなどに関心ある方、お待ちしております！(西山理子)

(地域社会研究コース 舩方周一郎ゼミ)

舩方ゼミは、比較地域研究を軸とし、様々な地域の研究を扱っています。先生の専攻地域は、ブラジル(ラテンアメリカ地域)ですが、ほとんどのゼミ生がポルトガル語科以外です！テーマも自由に、幅広く扱っていて、これから自分がどんな研究をしていきたいのか、はっきりしていない人も安心してテーマを見つけていくことができます。ゼミ全体で意識していることは、リサーチクエストを持ち、深めていくことです。興味ある分野の小さな疑問をゼミ内で取り上げ、全員で議論していきます。毎週、自分では気づかない点を指摘され、多くの気づきを得られました。自分の研究テーマのみではなく、地域研究そのものについて深く学ぶことのできるゼミだと思います。今年度は、他大学との合同ゼミを実施しました。他大の研究仲間ができるというのも非常に魅力的です！ゼミ内でも、交流の機会がたくさんあり、アットホームなゼミです。ホームページもあるので、ぜひ覗いてみてください。みなさんのことをお待ちしております！(畑萌香)

(地域社会研究コース 宮田敏之ゼミ)

「モノから社会を見つめる」、この考えに惹かれて私は宮田ゼミに入りました。多様な文化や歴史の中で、独自の発展を遂げた東南アジアを紐解くため、宮田ゼミでは自分なりの「切り口」を大切にしています。例えば、カンボジアの伝統絹織物が世界で注目される実態を調べたり、日本の乳製品メーカーがタイで成功した背景を調べたり、他にもタイの映画産業やミャンマーの自動車産業などゼミ生の専攻と興味は様々です。ゼミでは、お互いの問題関心を大切に、文献収集、分析、論文執筆方法を学び、意見交換します。多様な地域・テーマを扱う中で、徐々に「問いを見つける力」や「地域に根差す視点・社会を俯瞰する視点」が身についたように思います。ゼミは和気あいあいとした温かい雰囲気、先生は一人ひとりにじっくり耳を傾けてくださいます。自分の興味を深掘りたい、初歩から経済を考える力を養いたい、地域を通じて国際社会を俯瞰したい、そんな方にお勧めのゼミです！(野口亜依)

(地域社会研究コース 山内由理子ゼミ)

山内ゼミは、「大学で学問すること」を実感できるゼミです！3年生の段階では、『想像の共同体』といった古典やその他論文の読解を通じて、学術文献の読み方を学ぶとともに、日本を含めた現代世界を批判的に見る力を養うことができます。自分自身、ゼミでの学びを通して、それまで当たり前だと思っていた世界の見方が変わりました！4年生では、卒論の執筆が主な目標になります。ゼミ生の研究テーマや対象地域は様々で、ハワイのフラダンスやオーストラリアの先住民に関するもの、南北アメリカの先住民に関するものなど様々です。過去には、「旅行」をテーマに研究されていた先輩もいます。先生はゼミ生一人ひとりに寄り添ってサポートして下さいますので、文化人類学に興味のある方はもちろん、自身の関心領域を探求したい人にもお勧めです！山内ゼミで切磋琢磨できる仲間と共に、自らの“問い”に向き合ってみませんか？(赤木克行)

(現代世界論コース 小野寺拓也ゼミ)

「上限」については柔軟に対応するー4年最初のゼミでのこの言葉通り、ゼミ生の意欲や積極性に応じて小野寺先生は親身に指導して下さいます。図書館にない貴重な文献を惜しみなく何冊も貸して下さったり、日々の課題や卒論に関するアドバイスをたくさん下さったり…また、就活などと十分に両立できるよう、このゼミでは一足早く3年生で卒論準備の小論文を執筆します。これは他のゼミではあまり見ない取り組みだと思いますが、問いの立て方や論文の書き方などを早い段階で学ぶことで、落ち着いて卒論に取り掛かることができます。欧語文献と格闘したり先生のコメントを必死でメモして卒論の内容に頭を悩ませたりする中で、確実に力がつくはずですよ。「大学生活で思う存分学び切った！」という経験は一生の財産になると思います。ドイツ近代史についての様々な問題関心を持ったゼミ生と切磋琢磨しながら、小野寺ゼミで充実した2年間を送りませんか？(大熊葉月)

(現代世界論コース 田邊佳美ゼミ)

国際社会学と聞いて、どんなイメージが浮かびますか？ぱっと答えにくいかもしれません。例えば紛争のニュースを見聞きして、「現地の人は今、どんなふうにいるんだろう？例えば女性は？移民は？労働者は？」と考えたことがあるなら、本ゼミでの学びが合うのではないかと思います。ゼミ生はそれぞれ異なる問題関心を持っていますが、社会全体の大きな流れを掴みつつ、そこで生きる個々に目を向ける人が多いです。授業内容は文献購読とディスカッションが中心です。大きな特徴は二つ。一つ目はゼミ生の関心に合わせて文献が選ばれるところ。毎年多様な学生が集まりますが、先生がそれぞれに合ったテーマで本を用意してくれます。二つ目はディスカッションが盛んなところ。背景には安心して発言できる空気感があります。「自信がないな」と思いながら言ったことでも、先生をはじめとしたメンバーが真摯に受け止めてくれます。文献の分からなかった部分を皆で考えたり、内容に引き付けて自身の体験を共有したり、議論は多岐に渡ります。ピクニックや懇親会もあり、先生や先輩への相談もしやすい環境です。(Fさん)

(現代世界論コース 中山智香子ゼミ)

本ゼミでは「何が私を突き動かすのか」を徹底的に探求し、開示することが求められる。このグローバル社会の諸問題は常に複合的であり、学問の枠にとらわれずに手探りで問題と向き合わなければならない。既存のレンズにとらわれない自分なりの問題提起を、泥臭くみっともない姿を晒しながらも、直視し続け丹念に積み上げていく作業が不可欠である。具体的な活動として、まず三年次の春学期に基礎文献の輪読と並行し、複数名で論考を執筆する。それを土台に秋学期にはゼミ論文を個人で書く。そして四年次には集大成として卒業論文を完成させる。本ゼミの中で行うすべての活動には正解が無い。そのため周りの期待に応え、耳触りのいい言葉を並べる「いい子」は必要ない。比べられることも無ければ、良し悪しの評価をされることもない。そのような環境に身を置くことは、当然スリルを伴う。…が！！苦勞と引き換えに得られるものは何物にも代えがたい。それは、もはや戦友と言えるような存在である。真摯に学問に向き合う中で生まれる友情は、まさに本ゼミでしか得ることができない。同期や中山先生はもちろん、上級生や院生、卒業生の愛の鞭を受けながら、ともにパトスを燃やせるすべての外大生を待ち望んでいる。(中村優太)

(現代世界論コース 真島一郎ゼミ)

“自分は世界のどこに立っているのか”という共通の問いのもと、様々な分野に関心を持つ学生が、それぞれのテーマについて思う存分思考を深めることが出来るゼミです。研究テーマは多様ですが、各自でただ黙々と論文執筆に取り組むというわけではありません。むしろ、ゼミ友同士で研究テーマを共有し、友のテーマも自分事として一緒に考え、自身も新たな視点にであらうというのが真島ゼミの大きな特徴です。毎年真島ゼミ生は、素敵なゼミ友との出会い、皆と一緒に励まし合いながら書き上げた論文に誇りを持って卒業していきます。私たちの身近に存在する“なにごとか”。そのまえで、怒り、悲しみ、混乱し、考え、考え、考える…。そんな真島ゼミでの、日々を振り返るころ、以前の自分には想像もつかなかったような地点に立っていることでしょう。(文美友)

(現代世界論コース 梁英聖ゼミ)

「大学は、社会とは別の時間が流れている。それは、真理を探究する時間だ」——梁英聖先生がおっしゃったこの言葉は、梁ゼミを表す言葉としてもぴったりだと思います。ゼミでは、レイシズムと資本主義の関係を批判的に分析する思考力を身につけるため、古典を精読して社会理論を学びます。2022年度秋学期にはフーコーの『監獄の誕生』を読み、理解できるまで徹底的に教わりました。レジュメ作成や発表を積み重ねていく日々は、決して楽ではありません。しかし、普遍性を持つ理論を学ぶことは、社会の別のありかたを構想する上で必ず役立ちますし、どんな疑問にも真剣に向き合い丁寧に答えてくださる梁先生のもとでの学びは、とても楽しく、研究室には密度の濃い時間が流れています。知識や理論を、行動や実践に結びつけている梁先生の言葉は、鋭く、強く、優しいです。梁ゼミで、共に真理を探究し、「自分」という生の在り方を見つめ、創造してみませんか。(鳥倉捺央)

(国際関係コース 片岡 真輝ゼミ)

片岡ゼミでは、「記憶論」を通して、社会規範や人々の行動原理、国家間/集団間関係についてディスカッションをしながら学んでいます。歴史や政治、外交関係に興味がある方、なぜ?どうして?と疑問に思うことがある方にとってはぴったりのゼミだと言えます。「記憶論」なんて聞いたことがない、なんだそれは、と思う方、私もそうでした。過去の出来事を社会がどのように記憶するかは、現在の社会の規範によって決められますが、その過去の認識が我々の行動を規定する要因にもなります。このような記憶に関する理論を用いることで、小さな社会から国家間関係までも理解を深めることができるようになります。説明すると難しく感じますが、先生がとっても優しく丁寧に指導してくださるので心配無用です。地域に縛られないゼミだからこそ、各地域を専攻する生徒が集い、それぞれの地域についての知識を共有することができます。時に頭を使いすぎて筋肉痛になりそうな時もありますが、胸を張って研究を発表できるようになります!

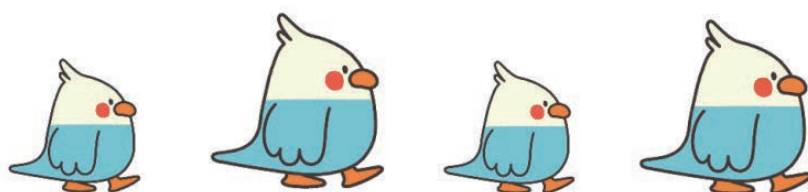
(藤澤咲弥)

(国際関係コース 篠田英朗ゼミ)

私たち篠田ゼミでは平和構築について扱っています。平和構築?堅苦しくて難しそう…なんて思ったそこの貴方!篠田ゼミは先生のユーモア溢れるお喋りと個性豊かな同期や先輩に囲まれた暖かい空間です!先生は私たち学生に親身に寄り添ってくださり、進路相談だけでなく日常の悩み相談にも乗ってくださいます。同期や先輩との繋がりも強く、ゼミ合宿や食事会、就活体験談共有会も開催されています。研究テーマは平和構築のみに限定されておらず、昨年の卒業研究のテーマもクールジャパン政策や日本的経営からウクライナ侵略やイエメン内戦まで、一人一人の興味に応じて様々でした。3年生で扱う MECE や PCM は就職活動にも役立っています。もちろん国連文書読解や紛争分析手段学習も行います。省庁や独立行政法人を志す方にもおすすめのゼミで、先生がゼミ内で貴重な裏話を共有してくださいます。就職実績も良好です。篠田ゼミ一同、後輩のみなさんをお待ちしています!(伊吹玲緒)

(国際関係コース 武内進一ゼミ)

武内ゼミでは主に広義の「国際協力」を取り扱います。指導教員である武内教授は日本有数のアフリカ研究者ですので、アフリカへの関心が高く、かつ国際関係や開発といった切り口で学びを深めたい学生には持ってこいの学び場です。さりとてアフリカ地域専攻の学生ばかりが集まっているわけでもありません。また、国際協力、国際政治、開発経済、安全保障など、ゼミ生の関心分野は十人十色です。だからこそ、自身にはない新たな観点で物事を発見できる可能性があります。そのために必要不可欠なことは、議論への積極的な参加です。学んだ事柄を自身の専攻地域に置き換えて考え、得られた気づきを意見として発信することがゼミにおいて重要な役割を担います(意外にもこれが難しいのですが)。何に対しても質問・コメントをする心持ちで臨むと、あっと驚かされる発見が生まれることがあり、それこそがゼミという場で学ぶことの面白さであります。(山口天音)



(国際関係コース 松永泰行ゼミ)

「巨人の肩の上に立つ」という言葉をご存じでしょうか。ニュートンが用いたことでも有名なメタファー、先人たちの業績の上に現代の新たな知見や学問の進展が生まれることを意味しています。松永ゼミは、そうした知見に富む卒業論文を書くために巨人の肩を目指して登っていくようなところです。ゼミで扱うのは政治、社会、国際関係といったテーマで、毎学期のはじめにゼミ生の関心を聞いてから先生が決定します。一昨年の秋は Historical Institutionalism(歴史的制度主義)、昨年はポピュリズムや極右政党の台頭(春)とその背景にある社会・政治的構造(秋)でした。毎週新しい文献を読むため課題量は少なくありませんが、専門的な英語にも少しずつ慣れていき、学期末には確かな成長を感じることができます。また古典から最新のものまで様々な社会科学の理論との出会い、問題設定や手法からの学びもたくさんあります。先生の解説を通してその分野に関する知識を得るだけでなく、文献の中でどのような論理展開が行われているか分析する力をつけられることも魅力です。広く政治や国際的な事象に興味を持つみなさん、ぜひ松永ゼミと一緒に巨人の肩の上からの景色を望んでみませんか？(中村響)

## \*サブゼミとは？

本学では、指導教員とは別の教員が担当するゼミを履修することも可能です。このことを、通称「サブゼミ」と呼んでいます。皆さんの先輩の実体験から、サブゼミの利用法を見てみましょう(なお、全てのゼミがサブゼミを開講しているわけではありません。サブゼミを履修する際には、必ずその担当教員と事前に相談しましょう)。

私は本ゼミとして山内由理子先生のおセアニア地域研究演習に参加しながら、サブゼミとして大石高典先生のアフリカ地域研究演習に参加しました。文献研究がメインの本ゼミとフィールドワークを重視するサブゼミに参加したことで、より包括的な学びに繋がりました。サブゼミでは、国内外でフィールドワークを行ってきた学生の発表を通して、インタビューの手法や現地の人々との信頼関係の築き方などを学びました。こうしたサブゼミの環境に強く影響され、臆病で海外経験に乏しい私も国外のフィールドに足を踏み入れることができました。同時に本ゼミでの文献研究のおかげで、いざ現地に行った際に「これ、あの本で読んだぞ!」という、知識と実体験が重なる瞬間が多くあり、自らの研究対象への理解を深められました。最初は不安に思うかもしれませんが、本ゼミとは一味違うゼミに参加してみると、刺激的で有意義な時間になるのではないのでしょうか？。(山本万智)

本ゼミでは巽先生のロシア史ゼミ(地域研究)に所属し、サブゼミではロシア・ソ連・旧ソ連圏の政治や経済について研究する鈴木ゼミ(地域研究)と、国際政治や安全保障などの研究を行う吉崎ゼミ(国際関係)に参加していました。もともと興味の分野がロシア史、ソ連政治、国際政治と多々あり、その中でゼミを一つに絞るのには苦慮しました。しかしサブゼミという形を取ることで、自身の望む学びを得られたと思います。巽ゼミと鈴木ゼミは共にロシア・ソ連地域研究なので、相互に学んだ内容をリンクさせることができました。また吉崎ゼミでは国際政治を中心として論文の書き方や研究の手法なども教わり、卒論に向けた自身の課題設定や調査などに役立ちました。複数のゼミに参加することで、新たな視点から探究に取り組むことができます。皆さんも自身の興味関心に照らしあわせて、サブゼミを検討してはいかがでしょうか。(青木優太) \* 2024年度は、吉崎ゼミはサブゼミとしては開講されません。

